

# 猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編

②

田宮 治

## 名犬への道

私にとっての名犬への道は、常に自ら作り育てた愛犬たちと一緒に猪と戦い続けることで、犬芸も猟技術も順次高めて夢の頂点に立つ、そのこと自体である。

そんな存在を「猪犬と登る猪猟の頂点」のタイトルで宣言し、その中に山彦会千葉支部の若者たちを乗せて、共に猪猟を通して名犬と名人、そして人格までも磨きながら登り詰め、完成しようという試みなのである。

他人から見ればできもしない絵空事を……と思われるかもしれないが、私にとっては真剣に考えた末のことである。「猪犬と登る」と前置きしたのは、自信の猪犬、つまり愛犬たちに対する私の執念で

ある。

名犬が欲しくて素材犬探しに始まった猪犬作りは、思いのほか大変なことで、言葉で表せない苦労と失敗の連続であった。その甲斐あって、猪猟人の私でなければ絶対にできないと自負する田宮系猪犬の完成まで漕ぎ着けることができた。

特に仔犬たちの資質の高さを天に証明するために、三秋の挑戦を企画し、その戦いぶりを万人に知らせてきたのである。

三秋の挑戦では、一秋に一胎の兄妹犬、三、四頭の仔犬をいつも登って来た慣れ親しんでいるいつもの仔犬仕上げの近道に乗せている。全力で戦い続け、鍛え上げて一秋で見事な咬み止めの芸を繰り出し、誰が見ても一流猪犬だと絶賛できる猪犬群を三秋（三年間）

で、三組仕上げ完成させることであった。

この三秋の挑戦では、自分が作った猪犬の完成度や仔犬の資質、さらに、どの胎の仔犬でもバラツキなく固定していることの証明を、どうしても自らの手で実証しなかったのである。というのは、単独猟の私が自分に合った良い猪犬たちが欲しいばかりに、夢の猪犬作りに乗り出したのである。

元々、私は犬作りなどは素人で、何もかもが手探り状態であった。そして、失敗や苦労を肥やしにしながら素材犬で仔犬を作り始めて、長い年月と膨大な犠牲を払い、巨額の経費をつぎ込んで頑張り通してきた。全くの自己流であったが、九代目にしてやっとのことで目的の猪犬を作り上げたのである。

猪犬は猪猟で使う犬であって、当然、猪に勝つ見事な一芸が出るまで資質を高め、固定した系統になるまで作り育てていく。訓練しながら芸質や戦いぶりを検証し、さらなる高嶺を目指し世代を重ねることである。

特に注意したのは、実戦で私（主人）だけに見せる愛犬たちの（主人）だけのおきの一芸を拾い集め、絡み合わせるようにして、猪猟人であれば絶対にできない猪犬を作ったつもりである。

本誌で博学の先生方が教えてくれている犬作りは、ポインターやセター、それとわが犬舎に今でも二十頭くらいいるブルーチックでの仔犬作りや育て方、そして訓練方法で大いに参考になり感謝しているところである。

しかしながら、私が求めていた

和犬での猪犬作りについては、既存の良い犬を素材犬として自分合う猪犬を作るとなると、何も参考になるデータがない。だから、ただやってみるのと、できた仔犬を見て知ることを、自らの動物的な勘と、どこまでもやり遂げる不屈の根性でやり通す以外になかったのである。

この勘と根性だけを頼りに、繰り返し仔犬を作っては猪猟道を登ってみる。そして、検証・修正してまた作り、登る。ただ黙々と作り続け登り続けていけば、天の恵みのように必ずはたと気づくことがある。

何事にもやり続けてさえいれば、誰でも必ず見えてくる物作りの真実が見つかるはずである。それこそが、探し求めていた猪犬作りの正道であり、物事の完成や成功の極意なのである。

私の猪犬作りは、その流れからいえば仔犬を作って三代目くらいまでは五里霧中の手探り状態であった。五代目くらいからようやく見えてきたようだったが、この時の嬉しさは今でもはっきり覚えて

いる。

この頃からその道がはっきり見えて、きちんと分かる見事な猪犬たちができるようになってきた。仔犬作りや猟法までも私が押し通した原点は、郷里の新潟県の山村で父や兄たちから教えられた五目（※五目猟：ヤマドリ、野兎、狸、穴熊、熊などの猟のことである。なお、村上市小俣にはキジ、鹿、猪はいない）の小型犬の使用法が基礎となっている。

この頃の体験と、ブルーチックの仔犬作りや前述の鳥獵犬作りの経験を頼りに、自分の持ち合わせている知識を結集して必死で頑張り抜いてきた。その押し通してきた目標は、俺一人で猪が獲れる単独獵の猪犬作り、つまり俺の使う犬たちだったのである。

しかし、残念ながらどんな一流猪犬群ができたとしても、人から見ればただの雑犬である。見事な猪犬を猪獵人に伝えたいとの私の思いは、当然のように「猫のような犬でも六頭もかければ誰でも猪

は獲れる」とか、「一胎の仔犬はバ

ある。子どもの頃からの私は、一度言い出した後には引けない筋金入りの負けん気が強い性格であった。

ラツキがあつてみんな良い犬にはならない」とか、「○○系など人が一生かけても作れるものではない」などの意見が他誌ではあつた。

この性格は高校時代によく現れていて、バレーボールのスパイカーとして県下ではばれ回り、マラソンでは一年生で全校の三位になり、運動会ではクラス大会だったので応援歌を作り盛り上げ、自らは四〇〇メートルの選手で走り、砲丸投げでは全校で優勝した。

幸いなことに、私の記事が全国の猪獵人の多くの方々に賛同いただいたようで、毎日のように嬉し

この記録は長く破られなかったと聞いている。特に握力、腹筋、肺活量は全校の体力測定では一番であった。

い連絡をもらえるようになり、俄かに知名な方からも仔犬や猪犬の問い合わせが入るようになった。ところが、訓練のいろはを書けば、「訓練でできることは何もない」と書かれたり、わが犬群や個人のことを想像をもって小説もどきに扱われることもあった。

なぜこんな自慢話を書いて説明したかであるが、それは私が人としての成長期にどんな気持ちで何を目的に突き進んでいたかを言いたかったのである。

猟友も見かねて「出かけて行って共獵し、犬たちと田宮さんの実力を見せてやるのが一番いいよ」とまで言うてくれたが、私は「ありがとう。どうせ記事の内容からすると負け犬の遠吠えだよ」と言い放っておくことにした。

私はどんな時でも一番を夢見て人知れず黙々と努力していた。つまり努力し頑張っていれば必ず成果はついてくることを言いたいのであり、同時に負けることが大嫌

い私や犬たちの批判が続いたので

いだとおきたいのである。



名犬アニー号（13才）。全国猪犬大会で2位2回、3位1回の実力犬で最高で申し分ない大物犬だった。猪でも鹿でも追い切り、熊さえも見事木上げた。最後は和犬の先頭に立ち、大猪に咬みを入れ終わったが、その時の悲しみは今でも昨日のようだ。和犬と共猟させ、咬みを成長させないことが追い犬を守る大事なことである

私は子どもたちとかできない人

に対しては、驚くほど気長に教えられるが、頭ごなしにやられると眠っていた本能が爆発し、誰が止めようとしても駄目である。そんな私が第一に掲げた猪犬作りの大目標は、どこに出しても恥ずかしくない猪犬であった。

しかし、その目標までもどこにも恥ずかしくて出せない犬かもしれないと、こと細かに拾い上げ、「かもしれない調」の空想をもってバッサリと否定され続けたので

### 困難な道を選ぶ

私はそんな中でもわが犬舎の猪犬たちの戦いぶりはこのように素晴らしいとの強い思いで、既に一流犬になった犬群の働きを実戦に乗せ、堂々と投稿し続けた。

「〇〇系」など、人が一生かかってもできるものではなく、固定もされるものではない、という声も耳に届いたこともある。そこで考えた末に絶対の自信を持って壮大な三秋の挑戦を敢行したのである。しかも、この実行は有名グループの中に自ら入ってやる実戦での一戦一戦が、すべて壮烈なまでの激戦を必ず完勝する様子を全国の猪猟人に発信することである。そして広く田宮系猪犬の出来栄を知っていただき、一胎の仔犬がどの胎の仔犬でもぞっくり揃って見事な一流犬になるということを自らの検証ではっきり証明したのである。

確かに、突然のように田宮系猪犬などと聞き慣れない猪犬が話題

になれば、誰だって俄かには信用できない。どんなに苦勞して作った猪犬たちであろうと、他人から見れば得体の知れない雑犬である。それではこの仔犬たちが可哀想である。

私が本誌の大先達のような博学の知識でも持ち合わせていれば、雑犬といっても十代にもなるのだから、猪犬としての系統くらいは明確にできたはずであり、この仔犬たちの将来は確実に守られただろう。

しかし、残念ながら私が大学で四年間学んだ知識は遺伝学ではない。父を説得して東京にまで出て来たのだから、せめて確実に交配の統計や仔犬の観察を続けて遺伝学を極めていけば、立派な系統が確立できたかもしれない。

元々、自分は単独猟に使う猪犬を作っているのである。どうしても血統書付きの既存犬種では納得できなかった猪犬としての実力を、血統書付き犬種よりも最優先にしたのだからそれでよい。

誰が何と言おうと、どんな批判にさらされようと、何としても守



良い仔犬はこの頃の遊ぶ仕種で、将来の猪犬像が予想つくものである。「この子たちは名犬になるぞ！」まずは綱引きでびしっと仕込むこと



奈智号と竜号。明都犬舎の看板犬だったが無理にお願いして当犬舎に来た。猪にはとてつもなく強く単独獵の礎を作ってくれた。15才で当犬舎内で長寿を全うした。おとなしくて良い犬たちだった

り続け、磨き続けて地力ある一流猪犬群に仕上げて、誰もが認める不動の地位に登り詰めさせ、本物の猪犬として後世まで残していきたい。そうした思いで作り上げたこの仔犬たちに、将来の安住の地を見つけてやりたい。

そのために私にいったい何ができるか。「仏作って魂入れず」という諺があるが、私にとって、まさに今がその時である。

改めて心機一転で、誰を頼るでもなく持ち合わせている自分流の知恵と負けん気の根性、そして絶対に諦めない猪犬作りで、単独獵の私がグループ獵に参加して人様の前で実際に猪と戦う田宮系猪犬の雄姿を見ていただく。

この一芸の素晴らしさと地力の凄さを内外に広く理解していただくために、十年くらい前から立案・実行してきたのが三秋の挑戦である。二年前の企画が「猪犬と登る猪獵の頂点」である。

私はこれらの企画で目標を追って、確実に頂点に立たせたいのである。一戦一戦の実践によって理想の猪犬を仕上げていくのであ

る。これは今までとは全く異なる万人の前で、夢の一芸を完成するのである。しかし、どんなに頑張っても、理想の猪犬を作ったとしても、そう簡単に認められるものではない。

猪犬がどのように評価され非難されようと、あらゆる創意工夫を凝らしていく。そして、どんな非難も乗り越え、猪犬はやはり田宮系が一番だと言ってくれるまで頑張り通していく以外ないと思っ

ている。幸い、この頃のわが犬舎には立派な仏（猪犬群）がぞっくり揃っている。魂だつて自らの技法で十分注入でき、見事な一芸が既に完成していたのである。この一流犬群の地力を仔犬の訓練と仕上げに上手に活用すれば、今までの以上の素晴らしい一流犬群が必ず完成できる。

さらに、この猪犬芸をもってすれば、どんな難題を突き付けられようと、高い目標を掲げて挑戦しよう、堂々と実践して必ず勝つてみせ、猪犬の本物の実力を肌で感じてもらうことで分かってもら

えると思っていた。

この頃になると、わが犬舎（山彦犬舎）にやっと遅咲きの春がやって来て、第二期黄金時代に突入した。ブル号、ゲン号、ハヤト号、富士雄号たちの咬み一番犬と、名犬コンビのクマ号とラン号、五郎号とサクラ号。

そして猪をギャツ、ギャツと猛追して足に咬み込み、行き足を止める足取りの名芸を得意とする牝犬の富士子号、チヒロ号、富士美号、千代号、ナオ号がぞっくり咲き競っていた。

今思えばわが猪犬群にもようやく日差しが当たり、猪犬の本筋がはっきりと見えた感じで、自信が確信になった時期でもある。

振り返れば、郷里で覚えた兎猟を引つ提げ颯爽と登場した田舎者が、「鹿猟などは兎猟と同じさ」と追っては逃がし、逃がしてもまた追うを繰り返し、人並み外れた体力と脚力で犬たちに檄を飛ばし、毎回が大物追いで終わっていた。

山梨の十枚山で「月夜の段」という峠まで二十分かけて車で登り、そこから犬たちを放すのである。この月夜の段という言葉の響

はいいが、そこは標高が一五〇〇メートルあり、日本では最高嶺が連なる南アルプスの静岡県寄りにある峠である。

犬たちが鳴き出すと、三十分もかけて登ったつづら坂を一気に車で下り、一番下にある堰堤でタツを張って待ち受けるのである。しかし、鹿にいつもあっさり広い河原を突き抜けられてしまう。

今しがた鹿が河原を渡った石の上に残した濡れた足跡を残念な顔をして眺めていると、犬たちの鳴き声が近づいて来て、「オヤジ、大鹿が来たろうが、なぜ撃たない」と物言いたげな目で私を見つめ、尻毛を目いっぱい振って近寄って来る。「ご免、ご免、また行ってしまったなあ……」と言うのが、いつものパターンであった。

このように、「大物猟などどれほどのもんや」と簡単な気持ちで飛び込んだものの、今考えてみると鹿を追い犬の単独猟で獲るなど論外もいとこで、誰が考えても馬鹿げたことである。

当然、鹿は犬たちに追われれば凄いい勢いで主人とは反対の方向に逃げる。それでも考え方は兎猟と同じようなものだが、兎とは全く違い、逃げる範囲がとてつもなく広い。そのため、たまに小さく回って来ればよいのだが、鹿の水漬けなどは犬たちが大山を一、二時間も追い通し、反対側とか山下の沢に落としてからの話である。

私の大物猟は、若い伸び盛りの追い犬を使って、大山を飛び回っていた鹿猟で過ぎてしまった。全く負けて知る大物猟の知恵で、追っても逃げられるのが当たり前の大変な時期で、失敗の連続であった。

そうした失敗や苦勞を何倍もして、やっと名犬リオ号やビーグルのサム号を育て上げた。さらに今でも心に残っている全日本猪犬大会で二位を二回、三位を一回獲得した名犬アニー号は、鹿はもちろんのこと猪や熊までも見事に撃ち獲ることができるようになったのである。

私は鹿も猪も熊の初獲りも、この追い犬たちの見事な働きのお陰で実現できたのである。それもよく考えてみると、偶然が幸いしたようなもので、単独猟で追い犬を使うことの難しさは獲物がなかなか

### 日本蜜蜂の重箱式飼育箱

- 蜜を採集する時、蜂の子を殺しません。
- 蜂の家族が大所帯になってもだいじょうぶ、簡単に増築できます。
- 初めての方でも簡単に楽しめます。希望者には簡単に飼育できるようご指導いたします。

#### 株式会社 朝日Conception

〒649-6338 和歌山市府中942番地  
TEL 073(462)0788 FAX 073(462)5548  
http://www.asahi-conception.com  
E-mail: asahi-conception@cap.ocn.ne.jp

か止まってくれないことである。

追い犬の一流犬芸が出来上がったとしても、単独猟ではタツがないので、きちっと止めてくれないことには、獲物を思うように撃ち獲ることができないのである。そんな当たり前のことにも、実戦を重ね何度も失敗し、悔しい思いを体験した揚げ句にやっとなつたのである。一人で獲るためによく考えた末の大決断であった。

(つづく)